

吾平町でさつまいも
生産を行う
かどくら じゅんいち
門倉 順一 さん



- 1 農業散布にドローンを使用するなど省力化を検討。
- 2 今年豊作の「べにまさり」。
- 3 収穫から袋詰めまでを一貫して行える農業機械を導入。



苗づくりなど基本的なことをしっかりと取り組むこと。夫婦2人で合計5haの畑を管理しているので機械を導入して省力化を図り、芋づくりが終われば翌年に向けた苗づくりや輪作を進めて畑の回転をあげるなど、なかなか休む暇ありません。ですが、露地野菜は仕事のオン・オフもしやすいので、精神的にゆとりを持つ時間も大切にできているのではないのでしょうか。

今後の目標は、まずは経営安定と現在生産の中心である「べにまさり」の活用方法の模索です。べにまさりは病気に強く、糖度14度と、口にすると上品でさつぱりした甘さのある品種。今年は良質なさつまいもができましたし、さつまいもを長年作り続けることで色々なことが分かってきました。これからも、地域農家との情報共有や勉強会を行いながら地域の生産力を高めていけるよう頑張っていきたいと思っています。

以前は地元企業で働いていましたが、もともと父が露地野菜の農家だったことをきっかけにさつまいも生産を47歳で始めました。芋づくりを始めて今年で10年になりますが、鹿屋は肥沃な土地で養分が広範囲に行きわたる地層ということもあり、さつまいもを作るには良い環境だと思います。芋づくりを始めて3〜4年は何事もなく順調に進み、平成29年が最高の収穫量だったのを覚えています。さつまいもの病気が発生している今、一番気を付けていることは、畑の土や



作り続けることで
分かるものがある

芋の未来のため 情熱を注ぐ

今、さつまいもは病害と戦うという局面を迎えています。対策を行い、その生産を懸命に支えて日々努力する、そんなさつまいもの未来を担う地元生産者や専門家に話を伺いました。



▲サツマイモ基腐病対策に関する市ホームページ

や茎が枯死し、芋が腐敗するという「サツマイモ基腐病」が発見されて今年で5年目。主な原因は糸状菌(カビの一種)で、ヒルガオ科のさつまいものみに感染する病害です。30年前の再来とも言えますが、今はこの難局をいかに乗り越えるかにさつまいもの未来が懸かっています。そのためには、菌を「持ち込まない」「増やさない」「残さない」という3つの対策が非常に重要です。この3つの対策の周知や現場指導を生産農家さんに行いつつ、新しい農業の実証実験などによる防除対策も現在計画中です。

農家の皆さんは本当に努力されています。まずは「オールかや」で難局を乗り越えて、この鹿屋が病害克服のモデルケースとなるよう対策を強化し、県や全国へそのメソッドを広げていきたいです。農家や関係業者の皆さんに笑顔あふれる日が早く来ることを願っています。諦めずに、一緒に鹿屋のさつまいもの未来のため、栽培を頑張っていきましょう。

農家さんの努力が
芋の未来を作る

大隅地域は温暖で火山灰や黒土という畑に適した環境ということもあり、露地野菜に加えさつまいもも作られるようになりました。「さつまいもの歴史は繰り返す」。これは私がちょうど社会人になった約30年前に流行ったさつまいもの病気のことを指します。ウイルス性の病気で当時多くの青果用さつまいもに被害が出たのを覚えています。この時は健全な苗を育成して乗り切りました。そして平成30年にさつまいもの葉

鹿児島県大隅地域振興局
農政普及課
木村 浩司 係長



▲病状が進むと、その一部が枯死。中央の苗と周辺の色が違うのが分かる。
▲サツマイモ基腐病にかかった芋の例。茎からの隣接部分が黒く変色しているのが分かる。

- 1 6月に行われた生産者向けの勉強会で農家からの質問に熱心に対応する木村氏。
- 2 地元農家との現地研修会にも参加し、交流を深める。
- 3 農業開発総合センター大隅支場では色々な品種が作られ、病害対策の効果検証を行っている。